

キリスト告白録第3巻『聖意体现』を読む（2）

「聖意体现」 四 聖意体现

2000年12月3日（東京 新宿）

奥田 昌道

楽音 終末の実存者 四 聖意体现 宗教の実存 死生の転換 ゲッセマネの祈り 十字架は絶対的否定 審判を通して生命に転換 人間の贖罪のための十字架 エン・クリスト 捨身の行為 十字架・聖霊の無の根源現実 霊の賜物 現在の天界の姿 天国部隊 否定を通して本当の肯定がくる 祈り
（参考）「聖意体现」 四 聖意体现

●楽音

今日は「四聖意体现」を中心にしてお話したいと思います。やはり、この「四」が大黒柱です。この「四」を皆さんが体得されたら——小池先生の福音というのものはもの凄く単純なんです——もう本当に「楽音^{うぐいん}」なんです、楽隠居ですよ（笑）。本当なんです、こんな単純な楽音はないと思うくらい。すべてのものが全部洗い流されて、何もないという感じです。生命と力に満ち溢れてくるという、全く先生の告白された福音は独一的なものです。私は本当に驚いています。自分が楽しんでさばっているのかと思うと、そうではなくて、力が出てくる。前に一生懸命にやっていたときよりも、何もしてないつもりでいる方が、本当に充実した力に満ちた喜びに満ちた生活ができるというから、これは不思議なものだと思う。昔の自分だったら、

「なんだ、お前は怠け者だ」

と自分を責めていたと思うけれども。この頃、私はもう自分を責めなくなりました。時の流れに任せているんです。キリストさま、主さまの時の流れに任せる。主さまという時の流れに、我意を捨てて全部任せるんです。もう、これがコツですね。そういうことがだんだんわかって参ります。

今、司会者が十年前の『エン・クリスト』誌（第41号1990年1月冬季号）に載っている「新しき歩みに向かって」という私の文章を読んでくださいました。1972年から私は新しい出発をした。それが40歳のときで、それで新しいスタートを切りました。それから18年たった1990年にあの文章を書いた。1990年という時期は、小池先生の伝道五十周年をやった時です。その2年前の1988年に先生は一応の、ある種の引退宣言をなさいました。つまり、特別集会は1988年の第35回夏期特別集会をもって打ち止めにするということ



を、箱根高原ホテルの集会で宣言なさいました。それが1988年でした。そしてその2年後に先生の伝道五十周年の講演会が東京の中央大学の講堂で行われました。そういうときに私はこの文章を書いたわけです。ですから、正に新しき出発に向かつての年なんです。つまり、先生は、

「もう自分は基礎いしずえは築いた、後は諸君が自分の足で歩いて花を咲かせたまえ。自分は大事な使命に、大詩篇を書くことに没頭するので、あなた方はそれぞれの召团らしく自分の足で歩きなさい」

という宣言をされた時ですから、「新しき歩みに向かつて」という文章が『エン・クリスト』誌に載ったんです。

是非、『エン・クリスト』誌のバックナンバーをまたずつと辿ってみてください。私はかなり書いていられるけれども、その時その時に本当に精一杯のことを書いています。ときには、背伸びしたり、いわゆる気負いが見られるような文章もあるかと思えます。けれども、その時その時の私のそのままの姿がそこに出現している。若いときに、歳取つてからの今の自分の姿であれというのは無理な話です。年齢に応じて、主の導きにに応じて、自分が形作られていくわけです。それを皆さんが見ておられるということですよ。

先程、話に出ました弘野兄弟は自分で何かしようとは思われない。本当に主の導きにゆだね切つておられるようなお方ですので、全く人の評価も気になさらない。自分は主さまに委ねて、そして、もういいようにしていただく。そうしたら、すべてがうまくいく。にこやかに恵比寿えびすさんのような顔になつていらつしやる（笑）。職場も明るくなつていくし、すべてがよくなつていくという。

全く、主さまというのはそういう方かたなんです。まあ、極端に言えば、

「苦勞はわし一人で十分だ。苦勞は私がする。お前たちは輝け」

と。そう言つてもらつて背負いこむ苦勞というのは、それは苦勞ではない。私はそう思う。「苦勞は買つてでもせよ」というけれども、ちゃんと向こうから持つてきてくれます。これをわざわざなんてはできない。「やつてください」と言われたら、「はいっ」と言つてやればいい。自分から別に買つてでる必要もないし、ちゃんとやるべきことは与えられるんです。そういうふうな、時の流れに任せていながら、しかし、そこにはもう自分というものが外れていますから、

「主さま、あなたの御意をどうぞそこに成就してください」

と、それだけが我々の祈りなんです。だから、

「主よ、汝の御意をなさせたまえ、この我を通して」

と、これを先生は「主の祈」の大黒柱だ、天地を貫く本当に太い柱だと、据えられたのはまことに炯眼けいがんと言いますか、素晴らしいことです。すべてはそれにかかつている。そして、そういう祈り、それがこの「主の祈」の今日の28頁からに凝縮されている。しかもこれは



先生がまだ若かりし頃と言ったら失礼ですけども、50歳程度の頃に書かれたんですから——書かれたというか、書かされたというか——そして、今と一貫したものが流れている。言葉は晩年の方が柔らかくなり、優しくなっています。昔は非常に難しい言葉を使っておられますけれども、流れているものは同じものです。同じ生き方を貫いておられる。そういう感じがいたします。

●終末的実存者

先程歌った召団讃歌B2番「使徒らの昔を」は1979年12月9日作詞となっています。先生が75歳のときの歌です。それから20年たってしまったけれども、その時の先生の心境がここにあります。4節に、

「聖旨^{みむね}のまにまに わが業^{わざ}をなし

主に在る生きざま 貫き往かん」

とあります。この「わが業」は、実はわが業ではない。主が賜うた業であります。確かにやっていたらっしゃるのは先生です。「大詩篇を書く」と仰ったのも先生です。いろいろな文章を書かれたのも先生です。しかし、先生でありながら、実は

「私は御霊^{みたま}によって書かされている。だから、私は自分の作品に責任を持たない」

と、それくらいの気持ちでいらつしやった。2節の、

「聖書^{みふみ}の現実^{うつつ}は 次元^{いのち}の高低

み霊^{たま}のたばしる 生命^{いのち}の世界」

この中に生きて、ここに生かされて、私は仕事をするんだと。それはもう御旨のまにまに導きに委ねて仕事をする。そういう「主にある生きざま」を貫き通す。この「主にある生きざま」という、この「生きざま」が「実存」なんです。先生が文章の中で「実存」という言葉を使っているのは、私は「生きざま」と言い換えたらしっくりと思います。

「み霊^{たま}のわが主は わが身^{からだ}を抱き

十字架に耐え得る 力を賜う」

という。先生は

「5節から7節は歌わないでほしい。これは自分の気持ちの告白だから、私が生きている間は歌わないでほしい」

と仰っていたのではないかなと思ひまして、京都では歌いませんでした。いつも4節まで歌っていた。なにか「先生、早くあつちへ行きなさい」と、催促しているように聞こえてはいけないと思って（笑）。決してそんなつもりはないでしょうけれども。先生はいつも晩年は、

「私は百歳まで生きる。百二十まで生きる」と言いながらも、



「いつ来てもいい」

という、その思いでいらつしやつたと思います。

これが先生の言葉でいえば、「終末的実存者」ということです。終末の中で生きる生き方です。この『聖意体現』の本でいいますと、「今日一生」、本日一生という生き方なんです。一日一日は向こうの神さまの御国から贈られてくる。今日という一日は「悲連続の連続」だということ。先生は集会もそうだと仰った。

「まあ、集会は、今日はいいや、次回に行こうなんて思うな。この集会は一回切りのものだ。過去ともつながっていないし、未来ともつながっていない。一回切りというものは、主さまからドーンと贈られてきたプレゼントだ。だから、この集会に居合わせない人は気の毒だ、可愛そうだ」

と、よく言われました。それはもの凄いのを先生は受けられて、それを今、この瞬間でなければ伝えられないものをプレゼントしているのに、それを受けてほしい人が来ていないということ、もの凄く嘆かれた。それはそういう気持ちなんです。非連続の連続です。今ここできしか受けられないものを、それを諸君は受けたまえと。だからよく、

「これだけの福音を受けて、なにをモタモタしているか」

と仰った気持ちはそれなんです。

けれども、我々凡人は、絶対次元の世界と相対次元の世界がもうゴチャゴチャになっていきますから、それで、相対次元のことで悩んでいるときに、絶対次元のものをポーンとぶつけられても、

「ちよつと離れ過ぎて、かけ離れているから、私は受けられません」

という拒絶反応を起こしてしまふ。人間というのはそんなもんですよ。夫婦喧嘩をしたあとで、「君を愛しているよ」なんて言われたって、

「なによ、しらじらしい」

なんてなもんです(笑)。多分、本当の告白だと思うんですよ、本当に申し訳ない、だから「愛しているよ」と言っただけでしょうけれども。向こうにしたら、あれだけいじめられて自分は傷ついているのに、それをほって置いて、「愛しているよ」なんて、「なんだ、しらじらしい」というようなものです。

先生はいつも絶対次元をぶつけられる。ところが、相対次元の我々は、相対次元でいろいろかかえたもので引つ掛かっていますから、それを洗えないわけです。それでなかなか受けられないということがあつたんだろうと思います。それで、先生は、

「その洗えないものをどこで洗っていただくのだ。人に洗ってもらうのか？ 人ではない。自分か？ 自分で始末がつかない。どこでか？ 十字架だよ。それが人の侵した過ちの故であれ、自分の侵した過ちの故であれ、何が原因であれ、いわれなき誹謗ひぼうであれ、何であつてもいい。それを本当に洗い流して、『わかつてい

るよ。私はわかつているよ。私がわかつていたら、それでいいんだろう？」と言って呼びかけてくださる方は主さまだけだ。しかも、その主さまは十字架で本当にそれをやってくださったんだから。だから十字架に来なさい」

「十字架に来て、そこで洗い流されない罪はない。十字架でもって洗い流されない恨みはない。兄弟姉妹の間のどんなトラブルも本当に十字架の下に立てば、本当に握手できるんだよ」

ということを何度も仰った。

今、先生という肉眼で見える先生はその姿を消されました。そうすると、霊の言葉の響きだけが聞こえてくるんです。ヘンなものが全部洗い流されて、本ものだけがそこで語り出されている。それが

「わが言葉は霊なり、生命なり」

という言葉として、聖書の聖言と同質の響き、言葉として受けとれる。これが我々にとって幸いなんです。では、本論に入りましょう。

●四 聖意体現

《「汝の御意の成し遂げられんことを、天に於ける如く地においても」（マタイ6・10 下）

汝の御意の成し遂げられんことを」との言は、イエスがゲッセマネで、最も深刻な祈において、そのまま叫ばれた言葉である。それは最早単なる言ではなく、宇宙にしみ渡り、乾坤をつらぬいてひびき渡った呻きであつた。「汝の御意が成る」ためには、わが意が否定されねばならない。決定的な肯定がなされるためには、決定的な否定が生じなければならない。神の意志と私たちの意志とが、その如く相反するのは、私たちの実存が根本的に失われた実存であるからである。

この「汝の御意が成るためには、わが意が否定されねばならない」以下の三行は本当に素晴らしい。何が素晴らしいかというと、これが徹底されれば救われるんです。ところが、ここが不徹底でありますと、いつまでたつても始まらない。そこなんです。だから、私はここが大好きなんです。

「自分が否定される」とは、自分で否定できるから言っているのではない。自分なんて否定しようがありません。それをなお否定しろと仰る。

「では、どうしたらよいのだろうか。それは十字架だよ」

と、こうくるわけです。だから、安易な十字架の受けとりかたを絶対、先生はゆるさない。徹底的に自分がもうしようがないという、償いかたなき罪びとという、その自覚を徹底的にして、初めて十字架の有り難さ、福音というものが身につく。そこを通らないとダメだ



ということをここで宣言しておられる。だから、これは一般の人に対しても厳しい言葉ですし、普通のクリスチャンに対してももの凄く厳しい言葉です。そこを本当に受けとつたら、凄いい飛躍がそこに生じる。その天的次元に飛躍できる。甦えるということです。

私は昨日の夜にちよつとメモをつくつてみた。小池先生の福音を仮に「小池福音」と呼びますと、

「小池福音の激しさはこの徹底的な自己否定にある。己の意志が否定されるということは、自己の存在そのものが否定されるということである。普通の生まれながらの人間の在り方は己を肯定して、即ち自己の存在、生命を至上のものとして、この自己の完成を目的とし、自己実現のために他のあらゆるものを手段とする――この手段化するという在り方をずっと戦後、養つてきた――自分を立てたまま、その自分を拡大していこうとする。このような人間の在り方を先生は「肉」と呼び、これを徹底的に否定なさった。この徹底的否定なくしては、本当の自己、本我は生まれない。」

これが先生の角度なんです。だから、これは戦後教育とのまっ正面の対決です。戦後の教育というのは、自分というものを極力大事にする。

「人の生命というものは地球より重い。その地球より重い生命をあなた方はいただいている。その自分を徹底的に大事にしなさい。二度と国のために生命を捨てたりしてはなりませんよ」

というばかりの、他者のために生命を捨てるとか、自分自身を憎むとか、自分を否定してかかるということではなくて、自分をとにかく大事にして、自己拡充していく。そこに自然に大きな花が咲く。そして、個を大事にするという、その角度だったんです。日本の多くの知識人はそれに共鳴した。ところが、先生が説かれたのは、

「神の前に自分は徹底的に否定されろ」

という角度ですから、これは知識人は嫌がりますよね。

福音による信仰的、霊的実存のほかの実存は、すべて挫折する没落への実存であり、虚無への実存である。哲学的、倫理的、美的実存は、すべて絶望への実存である。ただ信仰の実存においてのみ、それは審判への実存を転換して、救贖への実存として実存が実現する。

これは普通の人が読みましたら、「独善的だな」ときつと思う。

「福音による信仰的、霊的実存のほかの実存は、すべて挫折する没落への実存であり、もつと言うならば、死への実存である」と。

虚無への実存である。哲学的、倫理的、美的実存は、すべて絶望への実存である。》

と。この「哲学的、倫理的、美的実存」という言葉使いがあります。難しいですね。「実存」というのは「生きざま」と言い換えます。では「哲学的実存」とは、哲学的生きざまとは



何なのか。この「哲学的」という言葉で表されているのは、知的探究の角度、ものごとの真理を究めよう、宇宙の真理を究めようという、知的探究の角度です。だから、これは知識階級が最も好きなんです。どこまでも理性、理、知で徹底的にあらゆるものを追求する。

「不合理なるがゆえに我信ず」

とかいう言葉を引いて、

「信仰とか宗教というのはそれを否定する。信仰なんて、そんなものはダメだ。それは知的な誠実さを放棄することだ。誠実さを放棄して、どこかへ逃れている。そんなものは到底、受け入れられない」

と、哲学者は言います。そして、

「私は苦しいんだよ、実は。あなたはうれしそうな顔をしているけれども、私は苦しい。哲学者はみんな苦しいんだよ」

と言う。私は

「それは苦しいでしょうね」

と言いたくなる。でも、それは誠実なんです。もの凄く誠実なんだけれども、それは自己という延長線上でしかないわけです。その中でやっていますから。健気な努力^{けなげ}と言え、叱られるけれども、福音の角度から見たら、そういうふうに映るわけです。

それから次に、「倫理の実存」とは何かといいますと、道徳的な生き方です。日本人はわりに倫理道徳が好きです。倫理道徳の実践とか、そういう会をつくって、早起きし、いろいろゴミ掃除をする。いろんな宗教にだってそういう実践はありますよ。「一燈園」なんていうところは、お便所をずっと掃除して回るということを一つの修行として、奉仕としてやる。そういった、倫理道徳、実践ということ。

「知ではダメだ。実践だよ」

と言って、道徳的倫理的に実践する。これなら、頭は難しいことを考えなくても、身体でやっていくんですから、これで本当の世界に入ろうという。これは割りに日本人は好きなんです。誠実な人、真面目な人、良心的な人に多い。しかし、これもまた、やってみたらわかりますけれども、決して永遠の生命にはこない。

あの「富める青年」（マタイ19・16〜22）がそうでしたね。

「私は律法を全部守ってきました。けれども、平安がありません。どうしたら、永遠の生命をいただけるんでしょうか、教えてください」

と問うた。キリストは、

「モーセの十誡があるではないか」

「はい、全部、守ってきました」

「そうか、いい子だね。しかし、一つ欠けているものがある。あなたの持ち物を全部、売り払って、そして身軽になって、私の弟子になつてついてらっしゃい」



「いや、それだけは勘弁してください。一番痛いところをあなたはお突きになります」

と。

「彼は富というものにおいて自己を惜しんでいる」

と先生は言われた。富というものにおいて自己を惜しんでいる。

「一番、自分でこれだけは捨てられないというものを捨てろ」

と仰る。それが福音の厳しさだ。「捨てられません」と言つて、そこで投げ出せば救われるんだ。ところが、

「ああ、私はダメだった」

と言つて、すぐごと引き返す。これではダメなんだということを先生は書いておられます。いや、先生はなかなかするどいですよ。お金持ちだったら、そのお金というものがある。地位のある人だったら、地位というものがある。

「これだけは捨てられません」

というものが、なにか人間にはある。それを奪い取られたらもう、自分は否定されたようなものだ。それを正に神さまは求められるんですから、残酷ですね。

それから最後に、「美的実存」です。美的実存というのは芸術家の世界です。芸術の世界は知的でもありません。叱られるかも知りませんが、そんな理屈は考えない。道德的でもありません。むしろ、耽美の世界です。いわゆる通常の倫理とか道德とかに縛られない。自由奔放なんです。その美の中に自分を任せきっている。美の神に導かれるままに創作をやっている。そういう世界です。これも、棟方志功くらいのとこにいけば、もう自分がはずされていきますから、本当の凄い境地ですけれども。そこへ行くまでは危ない。道德の縛りがないんですから。

好きになればその人と一緒になる。こつちが好きとなればそつちへ飛んでいつて同棲生活を送る。しばらくしたら、また別なところへ行つて、そこで同棲生活をする。その中で動いてきたものを、情念を、絵や作品に表していくというのですから。本人は気楽でいいかも知れないけれども、回りはたまつたものではない。そういうのが割りに芸術の世界ではありますでしょう。これは神さまの眼から見たときには、

「所詮、お前は刹那に溺^{おぼ}れているだけではないか。刹那主義ではないのか。刹那の歓びに身をゆだねていては、本当の永遠の生命は来ない。求めているものはわかるよ。本当のものを求めている。芸術という形で自分を表現し、求めているものを表現する。ある意味では真剣だ。心も打つだろう。けれども、それは永遠ではない」

ということではないでしょうか。そんなふうに思う。



● 宗教的実存

先生はここでは書いておられないけれども、私は「宗教的実存」もまた同じと言いたい。ここに先生は——注意深くお読みください——

「福音による信仰的、霊的実存のほかの実存は」

と書いておられる。「福音による」という、これが大事なんです。福音というのは、先生においては「否定」から始まりますから。私は「哲学的、倫理的、美的実存」の他に「宗教的実存」という言葉を更に加えたい。この「福音によらない」ということは、自己を肯定したままでご利益りやくを求めていく、そういう宗教的実存です。それが日本人には割りに多いわけです。民間信仰だとか、いわゆる新興宗教だとか、ご利益追求型、幸福追求型の宗教とか信仰というものは、自分をそのまま肯定して、その自分を拡充していつてくれる、豊かにしていつてくれる、そういう道を求めているんですから、やはり、小池福音の立場からいえば、それは否定されるべきものです。だから、先生は「福音による信仰的、霊的実存のほかは」と言われたわけです。

哲学的、倫理的、美的そして宗教的、この四つのどの在り方も、本当にそこで神さまの前に自己が徹底的にひとたび否定されていなければ、その契機けいきを経ていなければ、所詮は肉の働きで終わりますよということです。「肉」というのは自己中心、自己拡充ということで、それだけで終わる。それは結局、土から生まれたものはまた土に返っていく。いつときピークを極めてもまた没落していく。結局は没落への実存、死への実存です。

「それでは死を突破できないよ」

ということを先生は言っておられるんです。

先生はここでは明示的には仰っていないけれども、私は先生の気持ちをそんたく付度して付け加えますと、こういった哲学的、倫理的、美的そして宗教的な、その実存を先生は頭から全部否定しているのでは絶対にならないということです。と言いますのは、神さまはすべてを生かそうとしていらつしやる。すべてを本当に生かしたもう方です。生かしたくて仕方がない。だから、それが真摯しんしな、真面目な、本当に一生懸命な営みであれば、どんな営みをも神さまはいつくしみの眼をもつてじつと見守り、包んでいくのださると思うんです。そして、

「願わくば、早く私に気づけ。私が何をあなた方に与えようとしているか、何を望んでいるか、それを本当に知ってほしい」

という、その呻きが天界から来ている。その呻きに答えてくれと。

「お前たちの側の求めはわかった。お前たちが真剣にやっているのはわかった。けれども、それだけではダメなんだ。私の思いを知ってほしい」

という、もうひとつ我々人間を包んでくれているものがある。これに気づかないといけない。これに気づかしてくれるものが実は聖書なんです。

私は若い頃は、むしろ対立で考えていた。福音によらない他のものはみんなダメ、どん



な営みも全部ダメ。ゼロ、マイナスだと。でも、私は今はそう思いません。みんな人間はそれぞれ実に一生懸命にやっておられる。それは素晴らしいと思う。けれども、その素晴らしいさが所詮は、死というものを突破できない。絶対的なところに到達できない。

「そこへ到達させて本当の意味で生かしてやろう、内側から生かしてやろうと根底から支え、そして上から光を与えて包んでくださっているその愛に気づきなさいよ」

ということ。これが私は福音だと思っています。

小池先生はよく仰いました。

「皆さんは空気に包まれていますね。空気を吸ってますね。気づいてますか？」

と。これは誰も気づいていない。誰も空気を吸っているなんていうことを意識していない。寝ていたって吸っている。スヤスヤと寝息をたてて寝ているということは、寝ていても無自覚でも、空気だけは吸っている。そして、心臓は鼓動している。そして、生かされている。本当に無意識で自分の意識さえもない、生への意欲もない。そういう無意識状態ですら、空気だけは吸って生かされて、そして、朝目覚めたときには、ああ目覚めたと思っている。これは全く空気に包まれ守られて生かされた。そして、外へ出ますと、太陽の光が照らしてくれている。これが十日も太陽の光がなかったら、どうなりましょう。本当にたちまち変になりますよね。

太陽の光があり、空気に包まれ、そして、同じく空気と太陽と水に養われた自然の木々がいて、それが我々をリフレッシュさせてくれる。小鳥が囀さえずっている、そういう大自然の中に生まれ生きている。それが我々、大和民族であつたわけです。今もそうです。そういう大和民族は、非常に自然というものを神として受けとりやすい。アニミズムと言うけれども、森羅万象の中に神が宿っている。山には山の神があり、海には海の神がある。私はそれはそれでいいと思う。それをもつと根源的に一番どん底から担い、そして上から照らしている、そういう人格的実存者、リアリティ、本当の実在者、それが——イエスが「父」と呼び、「主」と呼ばれた——先生が「父神霊神」と第一の項で書かれた、あの神さまなんです。これがあまりにも絶対的なお方だから、日本人は

「絶対者は嫌い。八百万やおよろずの神々が好き。絶対者を信ずるような信仰だから、世界に戦争を起こす。今でも争っている。八百万の神々を認めている日本人は戦争はしない」

と、こう言う。それはそういう面があるでしょう。けれども、日本人は不徹底、何でも中途半端で、灰色が好きなんです。

●死生の転換

だから、やはり私は本当の活かす福音に出会い、そこで徹底的な否定をいただくんです。



自分で自己否定なんかできない。自分で否定はできない。できない否定をイエスさまが十字架でもって徹底的に絶対否定をしてくださった。絶対否定のあとには絶対肯定がやってくる。これが死生の転換ということです。これをもう全身で

「はいっ」

と言って、身を投げ出して

「主さま、ありがとうございます！」

と言って受けとる。それが「内的な行為」だと先生は仰るんです。「信行一如」と仰る。信仰とは最も激しい内面的な行為である。外の行為ではない。この目に見えない世界で、

「主さま！ あなたの十字架以外に私は絶対に救われっこありません。自己否定なんてできっこありません。この罪なる我を赦したまえ。信なき我を赦したまえ」

と言って投げ出している。その時に、

「然り、われ汝を贖えり」

という御声が聞こえてくる。そこで本当に死生の転換をとげる。これは神秘の世界です。しかし、内的な激しい行だ。祈りと呼ぼうが、何と呼ぼうがいい。投げ出した。それは修行ではない。圧倒されるんだ。十字架というものが迫ってくる。そして、十字架に貫かれる。十字架でもう完全に、否定できない自分が否定されているということに気づかされる。

「ありがとうございます！ というその時に、オギャーと言って生まれたんだよ。

これを徹底してやってほしい」

と。これが先生の叫びなんです。だから、あの「富める青年」だって、

「いや、イエスさま、無理です。あなたは私の心臓を突き刺されました。無理です」

「そうか、そのことに気づいたらよかったね」

と、そう仰るんです。

「捨てられないお前の、その我を、自己を愛する心、自己愛、それを私が十字架で全部贖ったんだから、お前はそのままでもいいよ」

と。あるがままを受け入れてくださるのがイエスさまです。あるがまんま、どんな姿の間であろうと、そのまんまを受け入れてくださる。

「お前のマイナスは全部私がひつかぶったんだから、大丈夫だよ」

と。旧約聖書の世界ではそれがありません。自己責任の世界ですから、激しい律法に対して人間はもうどうしようもなかった。だから、せめて年一回、大祭司が至聖所に入行って、一歳の羔こひつじ、牡羊、そういった動物をほふって、その血を自分やみんなにふりかけるという儀式をやって、

「血でもって一年分赦してください」

と祈る。新しい一年が始まって、また一年たったら、また罪の贖いの儀式をやる。毎年毎年、繰り返す。ということは、毎年やったって無駄だということです。効き目がなかったとい



うこと。けれども、

「主イエス・キリストという、この活ける神の羔がただ一回献げられたことによって、一回切りで永遠に罪が贖われた。潔められた。もう二度と献げものは要らない」とへブル書で言っている。それだけの激しい十字架なんです。それが先生のこの導入部にありましたところです。

●ゲッセマネの祈り

『汝の御意の成し遂げられんことを』との言は、イエスがゲッセマネで、最も深刻な祈りにおいて、そのまま叫ばれた言葉である。』

と書いてある。この一行です。

「汝の御意を成させ給え」

というのは、

「できることならこの十字架という苦き杯を取り去ってください。けれども、私の意ではなく、あなたの御意をなさしてください」

と三度祈られた。その祈りはあまりにも激しい祈りであったために、

「その額からしたたり落ちる汗は血の滴のようであった」

と福音書に書かれています。

主さまが我々にこのように祈れと言われたこの祈りは実は、主イエス・キリストご自身の生涯を貫く祈りであり、それが極まったのがゲッセマネの祈りであったわけです。このゲッセマネまでは、主イエスの御思いと父の御思いはピタリ一つだった。

「我を見し者は父を見しなり。わが言はわが言にあらず、父の言なり」

と。すべて主さまがなさることは全部、神の御意がそのままそこに表れていたんですから、もう全くイエスさまは幸せだった。ところが、ゲッセマネでは、それが分離してしまった。イエスさまは、

「私はあなたの懐にいたい。今まで通り、あなたの聖言を伝え御意を伝え、人を癒し赦し、そうやっていつもあなたと一つでありたい」

と。ところが、あのゲッセマネでは、神さまは、
「いや、その時期は過ぎ去った。もはや、どうにもならん。お前は私から棄てられて、十字架を負え。十字架で私から棄てられろ。地獄へ落ちろ」

「何ですか？」

「人の罪はそれほど深い。人の罪、肉、これはもうどうにもならん。お前だけしかできない。お前だけしかできないその救いようは、お前が棄てられることだ。全人類に代わって、お前が審判を受けることだ。それしかない」

「いえ、全知全能のあなたなら、そんなことではなくて、もつと別の道があるでし



よう」

と言って訴えられたけれども、聞かれなかった。

「いや、ダメだ」

と。それが、

「汝の御意をなさせたまえ。この我を貫いて」

と。それをゲッセマネで主は受けとられて、そして、そのあとはもう毅然^{きぜん}として、あのゴルゴタの道を歩まれました。ピラトの前でも一言も仰らない。何も仰らない。

「答えないのか!」

とピラトが言っても、黙っておられた。

●十字架は絶対的否定

そういう主さまの御姿がここに極まっている。だから、そういう姿の前に、己というものがいい加減な己でおれないではないか。それを完全に否定してくださった十字架だけが絶対的な否定だということ。

私は「徹底的に否定する」と言いました。「徹底的」というのは多分、99.999...%ですよ。それを徹底的と言います。「絶対的」というのは100%なんです。その99.999...%と100%は絶対に違う。「99.999...」というのは量的な徹底ぶりなんです。けれども、「100」というのはもう完全なんです。それは絶対なんです。イエスさまの十字架は絶対的否定なんです。それをプレゼントしてくださった。私たちは

「ありがとうございます」

と言って受けとる。そこから先は、

「御^み旨^{むね}のまにまにわが業^{わざ}をなす」

と。それしかありません。十字架で一端葬られた人間がどうして自己主張をし得ようか。しかも、

「十字架ぬきでは私は自分で否定できない」

と言って来たんですもの。だから、十字架をいい加減な形で受けとったらダメなんです。

「本当にもう自分は死にたい。自分で自分を抹殺したい」

と思うくらいに、自己嫌悪と言いましょか、自分を責める。責めてもどうにもならん。自分で自分の生命を絶ったって、これは自分の靈魂とか、わが意識というのは残りますから。

「身体を殺しても魂を殺し得ぬ者どもを恐れるな。魂を、靈魂を地獄の火に投げ込

む権威ある方を恐れよ」

と仰った。だから、人間は自分で自分を否定したって、否定になつていないんですよ。それは逃げているだけなんです。そうなるともう、前にも進めず後ろにも進めず、どうしようもないところに十字架というものが示されている。



「お前は自分を責めなくていい。私の十字架を受けとりなさい。そこで全部、終わっているんだから。全部終わってしまったっているんだから。絶対に終わっているんだから」

と。

「この故にキリスト・イエスに在る者は罪に定められることなし。生命の御霊の法^{のり}は汝を罪と死の法より解放^{ときほな}したればなり」(ロマ8・1)

という、あのロマ書8章1節の宣言が響きわたっているんです。だから、「十字架に表れし神の愛」と、こう言うわけです。十字架で我々はイエスさまに出会え、そこで出会ったイエスさまはもう過去も現在も未来も全部ひつかぶって、

「お前と私は一つだよ。お前を責めるものがあつたら、それは神さまであれ天使であれ、私は戦うぞ。でないと、私は無駄死^{むだじに}したことになるではないか。犬死^{いぬじに}したことになるではないか」

と、そうやって身体をはつてくださるんです。

● 審判を通して生命に転換

先生の文章をもう少しだどつていきましょう。

《ただ信仰の実存においてのみ、それは審判への実存を転換して、救贖^{きゆうしよく}への実存として実存が実現する。

「審判への実存を転換して」とは、十字架のことです。ちよつと難しい言葉ですけれども、要するにこれは、その審判も十字架の審判を抜きにしては、旧約聖書におけるような直接的な審判だったら、人間はやりきれません。あの民数紀略には、「つぶやいた人たちは一夜にして二万五千人殺された」なんて出てきます。

すなわち、私たちの意志が徹底的に「否」と審判される烈しい律法の自覚、換言すれば、私たちは神の前に「一人も義人であり得ない」自覚である。

「義人なし、一人だになし」という。

それは、パウロがロマ書で明言し、ルッターが真剣に体得した真理である。罪が腹の底から告白されて、神の意志(それを義とは言ふ!)の前に降伏し、

神の意志が貫かれることが義なんです。また、神の意志そのものが義なんです。

さきほど、旧約の審判は激しいと言いました。

「一夜にして二万五千人が葬り去られた」

と言いました。あれは神の審判です。その審判を通して、では彼らはどうしたかというところ、それで救われているんです。審判を通して神は救っていらつしやる。けれども、その審判は現実の死という審判を通らなければならなかった。

ところが、我々においては、その審判はキリストが受けとつてくださったから、私たち



はこの身このまま、そのままもう霊の生命なんです。旧約の人たちは、本当にもろに審判を受けて、審かれたのちに甦える。そういうことだったんです。だから、残酷に一見みえますけれども、それは救いだった。旧約においては、審判が救いだったんです。私たち新約においては、その審判すらもキリストがひつかぶってしまわれたから、もうあるがままそのままでもう生命に転換できるという、これが福音です。だから、これが究極のものなんです。ですから、もう一度もどりますと、

それは、パウロがロマ書で明言し、ルッターが真剣に体得した真理である。ルターは独房でぶっ倒れていましたよね。

罪が腹の底から告白されて、神の意志（その義）の前に降伏し、わが意志（自己義認、自己追求、自己拡充）を否定し去るとき、はじめて、神と我との関係は成り立つのである。この厳しきです。これを私は日本の同胞の方々にも受けとっていただきたい。

「この否定を通ることによって、あなたの方の今までのプラスは本当のプラスに転換する。あるがままに受け入れてくださる。しかし、ここを通らないと、それは中途半端です。おせっかいかも知れないけれども、これは神さまの御思いなんです。神さまは呻いておられる。あなたは自分の世界だけで満足してられるかも知れない。でも、神さまはさびしいんだ。神さまは悔しいんだ。神さまは、もつと本当に生きてほしいと願っていらつしやる。気づいてください」と、これが私の呼びかけなんです。

●人間の贖罪のための十字架

30頁1行目にいきます。

《神に「然り」ということは、おのれに「否」ということである。「主の祈」の中核は

正にこの「汝の御意を成させ給え」の一言にある。》

この「汝の御意を成させ給え」というのは、自分を投げ出して行かなければいけない。傍観者的に第三者的に、「ああ、神の御意が成ったらいいのになあ」という、そんな気楽なものではないと言っておられます。

それから、赤穂浪士は主君の義が踏みにじられたことにプロテストして、その当時の掟おきてに逆らって仇討ちをした。そのかわり、その責任をしっかりとった。この責任意識に素晴らしいものがあるということをここで触れておられます。

それから、終りの4行目から、

《聖意を現成するため、み旨を行ずるために、イエスはその生涯を貫き給った。それ故に、ヨハネ伝に繰り返しいあらわされている如く、イエスは、神のことを「我を遣わし給いし者」と言って居られる。彼は神の僕として霊神の意志を行ずる者、父の子として父神の本質を具現する者として、自らを自覚し給った。》



「父神霊神」のところで出てきたように、神さまは一方では「主」であります。イエスさまにとっては神さまは主、即ち自分は「僕」です。「あなたの御意を」と言う。そういう意志を行ずる者として僕の姿です。それから、同時にその主は「父」でありたもう。愛の父でありたもう。その父にとって自分は愛されている「子」である。「子たるの自覚」ということです。「僕たる自覚」と「子たるの自覚」、この二つがピタリ一つである。「神の意志を行ずる者」(僕)、そして、「愛なる神の本質を現す者」(子)、そういう姿でイエスさまはおられた。

つねに人間の意志を殺して、神の意志を生かして在り給った。そうして、十字架にくっつかぬかの祈においては、人間の弱さをそこまで担いたもうたイエスに、あの苦痛があつたわけである。イエスは、エリヤ以上に、いきなり天界に昇るに最もふさわしい人であつた。しかし、イエスはキリストとして、

即ち、救い主として、人間の贖罪のために十字架を現実を負わねばならぬところに、追いつめられ給つたのであつた。十字架の死を通して、全人類の罪と死に対する勝利を勝ちとり、

「罪と死」、それを滅ばされたわけです。

それを与えるという路！ 当時の権勢者・祭司・学者・パリサイ人、はてはイエスのあわれみをつけた群衆からさえ、またイエスに従いしあの弟子たちにもすらも、棄てられて。

これと同質なのが、我らの神の「汝の意志」なのである。

「汝の意志を」と言うときには、そういう気持ちで「汝の意志を成させたまえ」と祈らなければならぬというわけです。

この「汝の意志をして成らしめ給え」との祈において、我らが否定されることは如何にして可能であるか。それはただこれを実存し、砕け得ざる我らのために、自ら砕け給つたキリストの十字架の恩恵を、パウロの言いし如く「キリストと共に十字架につけられた我」を見ることによつて。我が罪のこの身このままこの意志が、既にかしこなる十字架につけられていることを、恩寵として受けとることによつて。わが意志がかしこに死んでいることを信じ受けとることによつて。そのような砕けの完了、徹底的手術の完了を、キリストが自らわがために十字架においてなし給つたのである。その事実を、現実として受けることによつてのみ、可能なのである。》

この数行がまた本当に素晴らしい。私たちは自分で自分をどうしたつて否定できない。その否定できない自分を置いて、「汝の御意をなされたまえ」とは祈れない。そしたら、イエスさまが祈られたように本当に祈れるにはどうしたらいいのか。イエスさまは現実には十字架に架けられた。そして、「汝の御意をなされたまえ」を実践された。しかし、我々はその否定ができない。どうしたらいいのか。



それは、イエスキリストのこの十字架は、それがご自分にとって「御意をなされたまえ」であると同時に、私たちに与って「御意をなされたまえ」の出発点を与えてくださった。即ち、我々の否定をそこで身代わりに否定してくださった。十字架の砕けはご自身の砕けであると同時に、私たち自身の砕けであった。そこにおいて、私とイエスキリストとが本当に十字架で一体となって砕かれ審かれ、そして、死から甦えらされる。そういう事態がそこで起こっているんだということです。

そのことはパウロのエペソ書2章に——我々はどうだったかということ——書いてある。

「1 汝らは前には咎と罪とによりて死にたる者にして、² この世の習慣に従い、空中の権を執る宰、すなわち不従順の子らの中に今なお働く霊の宰にしたがいて歩めり。

サタンのことですね。そういう霊の宰に、サタンにあやつられていた。

³ 我等もみな前には彼らの中におり、肉の慾に従いて日をおくり肉と心との欲する随をなし、他の者のごとく生れながら怒の子なりき。

「怒の子」というのは「神の審判の対象である子」ということです。

⁴ されど神は憐憫に富み給うが故に我らを愛する大なる愛をもて、⁵ 咎によりて死にたる我等をすらキリスト・イエスに由りてキリストと共に活かし(汝らの救われしは恩恵により) ⁶ 共に甦えらせ、共に天の処に坐せしめ給えり。」(エペソ 2・1〜6)

ここには後半部だけが書いてあります。前半の

「我れ主と共に十字架せられたり」

ということ。そこで主と共に一緒に裁かれ砕かれ死においやられた。だからこそ、主と共に活かし甦えられ、天のところに坐せしめたもうた。即ち、十字架において、十字架の主さまにおいて、私たちはそこに吸い込まれてしまっている。そこで一つなんです。だから、「主が審かれた」ということは「私が審かれた」ことなんです。「主が地獄へ突き落とされた」ということは「私が地獄へ突き落とされた」ことなんです。そして、「主が天に昇られた、復活された」ということは「私たちが主と共に復活した」ということ——いや、復活したと言ふよりも——

「新しい霊の生命に生まれ変わった、霊体となって現れてきた」

ということ。そして、「天に昇られた」ということは

「私たちも今、霊的には天のところへ昇っている」

ということです。そのことをパウロはここで言ってくれているわけです。

●エン・クリスト

それが先生が言われた



「エン・クリスト(キリストの中に)」

という現実なんです。それはもうすべてが「主の中に」です。これからの私たちの在り方、生きざまはすべて「主の中に」ということしかない。責任者はイエス・キリストなんです。私たちはもう、主さまが全部、責任をとってくださる。「主の中に」なんですから、自分で責任をとることはない。そのかわり、

「主さま、何でも御旨のままに」

と、今までは言えなかった「御意のままに」ということが言えるんです。こんな

「キリストに在る神の大肯定」

を日本人は受けとってほしい。日本人は一番、自殺が多い。本当の肯定がないから、自殺になる。ヨーロッパ人はしぶといから、自殺なんかしません。それは大肯定を知っているからではないでしょうか。日本人は相対的世界でしか生きないから、何ごととも相対的にしか解決しない。死んだらお終いでしょ、それで終りなんです。ね。

「死でもって終わらない」

ということをやヨーロッパ人は知ってますから、死なないんですよ。そして、教会へ行くわけですね。それで救われた気になっているのかどうかは知りませんが、本当の大肯定です。誰が否定したって、

「いや、私は生きている。私はお前を活かす。私はお前を贖った」

と、この響きが天からひびきわたっているから、この神さまの響きに対しては誰も逆らえない。だから、この福音こそはもう究極なるもの、終局なるものです。ここから先のものは出てこないと思えてしょうがない。なにも他の宗教を否定するのではない。みんなを本当のものに活かして、一切を一つに帰せしめたもう。エペソ書一章にも、

「万物を一つに帰する」

とありましたね、

「即ち時満ちて経綸にしたがい、天に在るもの、地にあるものを悉くキリストに在りて一つに帰せしめ給う。これ自ら定め給いし所なり」(エペソ1:10)

「経綸」というのは神の御意のことです。「天に在るもの、地にあるもの」、哲学であろうが宗教であろうが何であろうが、すべて一切を一つに帰せしめたもう。究極なるものに収斂したもう。だから、宗教争いなんて本当に要らないことなんです。よく仰いますね、

「最後にたどり着くところは一緒なんですよ。富士山の頂上に登るにはいろいろな道があるけれども、最後は一つなんですよ」

と。私は

「はい、その通りです。ただ、あなた方の道でそこまで辿れるかどうかは、私はやったことがないからわかりませんよ」

と言いたい。そして、



「どうしてもダメだった」

と言って白旗をあげたら、キリストが微笑んで抱き取ってください。お釈迦さんの姿で抱き取ってくださいるかも知れない。それはどんな姿をとられるかは知りません。でもとにかく、「ダメだ」と言って投げ出したところで救われる。そこへ来ないと、自力の修行はしんどいです。また、悟りの宗教もしんどい。悟ったつもりが、まだ悟っていないかったと、またもとへ戻ってみたい。よく言われますね、

「わしはもう悟った宗教者だ。癌と宣告されようが、何と宣告されようが平気だ。どうぞ、仰ってください」

と高僧がお医者と言った。お医者が安心して、

「はい、あなたは癌です」

と言ったら、とたんに動揺したという。人間が「悟った」とか言いましても、私は信用しておりませんと申します（笑）。それは、私はもう自分を信用していないから。一番信用できるのはキリスト、主さまの救いです。この徹底的な贖いです。徹底的な否定ですよ、そして、徹底的な肯定です。そういうことを、この「四聖意体现」のところで私は受けとるものですから、もうありがたくてしょうがない。

●捨身の行為

31頁の終りから3行目。そうしたら、これを本当に受けとったら、

《そこには、深い祈と烈しい捨身の行為が必然起こってくる。

破れかぶれで、「何でもやったるぜ」という、激しさですよ。いっぺん死んだんだから恐いものはないじゃないか。そして、キリストさまという凄いバックがついてくれている。人間が棄てたって、この方は棄てたまわない。正に天下無敵だよという、そういった本当の力強さが出てくると言うんです。

大死一番とは、キリストの恩恵の力に迫られて突きぬける信仰的行為である。

信仰は正に行為だ、内的な行為だと。

信仰は正に信行であり、かくてキリストとの信交となる。

あるいは、神との交わり、「神交」となる。

そこに真の聖霊の現実が、根源相があるのである。かくてパウロと共に「キリストわがうちに生き給ふ」という告白に移る。霊なるキリストをかくの如く受けざる限り、「修養」も「冥想」も「没我」も空しく、

いわゆる「修養や冥想や没我」は宗教的な境地です。それも空しい。これは多分、カトリックの方の世界だと思います。中世ではそういう神秘的な世界があつたし、今もそういうものがあるでしょうから。修道院の生活とかを思っておられるのかも知れません。これも本当のキリストを受けとってはじめてこれが活かされる。そうでないと、それは空しく、



それはキリストの十字架と復活の生命を、拒否することであって、福音からの逸脱である。いわゆる「修養」や「神秘」の路でいかに自己を否定しようとも実は自己を肯定しているのである。

これなんですね。「私はこのように修行しましたから、私はこれだけのものを突破してきましたから」と言つて、自己を立てているわけです。そういうことになってしまう。

自己の真の否定は、自ら否定できない根源的罪性がキリストの十字架において否定されていることを絶対恩恵として受けとることである。霊的転換によつて、霊的実存のいのちに入り、成就されてゆくのである。そうでない限り、自己の否定は観念的な思い込みすぎず、十字架も復活も、思われたる信仰内容にすぎない。》

いわゆるプロテスタントの「信仰のみ」というのが、ヘタしますと、思い込み信仰、観念信仰に陥りやすいということに警告を発しておられるわけです。

●十字架・聖霊の無の根源現実

そして、次の段に行きます。

《かくて「汝の意志を成らせ給え」は、十字架を枢軸すうじくとして「わが意志」が否定されると同時に「汝の意志」がわがうちに成りゆく消息である。即ち「汝の意志」は、十字架の故にわがうちに救贖の実力として降下してくる。汝の意志の場に聖霊が鮮やかにはたらき給うのであって、救贖の実力の内実は、聖霊と共にはたらき来たる汝の意志である。そのとき私たちは明らかに福音が神の力であることを知る。かかるおごりかな意志の転換の場は、

あるいは、霊的生命の転換の場は、

全く観念の事象ではなく、聖なる霊のはたらき給う事象である。それはまことに根源的な聖霊の場であつて、断じて心霊的な現象の場ではない。》

霊的な体験のことを告白したりしますと、よく人は

「それは心理学的な何かでしょう。心靈現象でしょう」

と仰る。絶対そうではない。これは本当におごりかな聖なる場の出来事だ。聖霊という聖なる霊の働きの、いわゆる心霊的な働き——スプーンが曲がったとか、そういう何か不思議な魔術的な業が行われるといった霊の現象——とは全然違うんだということを先生は訴えたいわけです。

だから、十字架というところに神の義が貫きます。そこに自分が碎かれます。自分がそこでキリストと一つにされて、十字架で自分が碎かれます。同時に即、それはもう生命へと転換しているんです。十字架の場に聖霊がはたらきたもう。だから、

「十字架と聖霊は絶対に切れません、離してはダメですよ」

と先生が仰るのはそのことなんです。神の義が十字架において貫かれたときに、そこに聖



霊があざやかに働く。

「汝の意志の場に聖霊が鮮やかにはたらき給う」

と。今度は、聖霊がはたいておられるときに、そこには神の意志が貫いている。汝の御意が貫く。だから、それは神の力として自覚されてくる。福音は神の力である。旧き我を葬り去り、新しい我に生れしめ、しかも、新しき我をして神の御意を成就せしめる実力をそこに与えてくださるから、神の力である。まことにそこは根源的な聖霊の場であると。

小池先生の往生四周年記念会のとき(2000年8月27日)に私は

「十字架・聖霊の無の根源現実」

ということを申し上げましたが、そこはここを受けとってくだされば、よくわかっていただけていると思います。根源的な聖霊の場であるということ。そこからいろいろなものが流れてくるんです。現れてくる。

● 霊の賜物

次の33頁には、コリント前書12章、14章の霊の賜物^{たまもの}のことが触れられている。先生は

「現象にとらわれるな」

と仰っています。先生ご自身においては、病の癒しだとか、異言だとか、いろいろな現象が伴いました。また、集会においても当時、そういうものが伴う人がたくさんいました。けれども、先生は

「それに惑わされてはダメだ、囚われてはダメだ。根源現実^{根源現実}に常に目を注いでいなさい。いわゆる目には全然見えないが、しかし聖霊のはたらきがあるんですよ」

と。だから、根源の場で聖霊が働きたもうとき、外へどんな現れ方をするかは、それは神さま任せなんです。それは人間の側がコントロールすることではない。はなばなしい異言だ、預言だ、癒しの賜物だといって現れてくる人もあれば、何も現れないが、しかしその人の柔和な愛の人格となって現れてくる、接するだけで心がうたれる、接するだけで心が癒される、そういう現れ方もあるわけです。愛の現れが一番素晴らしいんです。

コリント前書13章に、

「⁸愛は長久^{いつ}までも絶ゆることなし。然れど預言は^{すた}廃れ、異言は^や止み、知識もまた廃らん。……¹³げに信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなく存^{のこ}らん、而して其のうち最も大なるは愛なり」(コリント前13・8…13)

「預言は廃れ、異言は止み、知識は廃れる。しかし、終わらないのは愛だ。信仰と希望と愛は終局的なもので、最も偉大なるものは愛である」

とあります。聖霊の賜物として外側に現れてくるものは武器としては非常に力強い。サタンの働きを叩きつぶすための武器としてはいろいろ賜物は素晴らしいけれども、それはどこまでもある意味で手段なんです。本質ではない。本質は愛なんです。聖霊の本質は愛です。



父なる神は愛の神なんです。それをキリストは現してくださった。キリストの御業は全部、愛の現れだった。だから、その根源の場で聖霊がはたらき給うと、そこに愛が成就していく。これが最も素晴らしいことです。

「あなた方が本当に愛し合うならば、世の人はあなた方が私の弟子だということを認めるよ」

と主は仰いました。そういうことがこの33頁から出てまいります。

ここでは、そういう聖霊の賜物が鮮やかな形で現れるときに、それは聖霊の現れなんだから警戒してはいけないということを言っておられる。

《いずれにせよ、そこには聖き神の力が根源的にはたらく。それがどの様な現象を起こそうと、起こさざると、問題ではない。

この「起こさない」方も等価値ですよ。

ただ真に梅の樹ならば、梅の花が咲き、梅の実が成るように、この如きキリスト一切の現実が本ものであるなら、それは聖霊の根源相の場であり、その現象は聖霊による現象である。それをとやかく警戒したり、批判するならば、それはキリストの十字架に、キリストの現霊たる聖霊に対する不信と言わざるを得ない。福音書は言つまでもなく、使徒たちの「愛」の実存も「力あるわざ」も、すべてかくの如き現実であった。福音書や使徒行伝は、そのようなおごり、自覚のもとに読まれねばならない。

かくて端的に言つならば、「汝のみ意を成させ給え」は、

「汝のみ意をこの罪びとなるダメな私を通して成させ給え」

である。深く深く十字架に救われている魂においては、自らには徹底的に弱くダメな罪びとという破れの器、土の器の自覚がいよいよ深くなる。それだけに、いよいよ砕かれて、力強く、大胆に、率直に、親しく

「汝のみ意を我において成さしめ給え」

と祈れるのであり、そしてそこには、聖霊が聖く熱き白熱の愛としてはたらいてくるのである。この恩恵の現実を如何せん。ただ聖名を讃えるのみであって、われらの側に誇るべき微塵の影も形もないのである。そのとき、

0=100 (0=8)

というイエスの現実が近くなる。》

●現在の天界の姿

そして、詩篇などを引かれまして、実は、見る目をもって見るならば、天地は神を讃えているのではないかと。天使たち、神に仕える者たちが讃美の歌をうたっているのではないかと、そういうことを仰っています。

《天界にあつては、神と羔の聖座を中心として、天使や聖徒等の万軍における聖き意



志が行ぜられているのである(黙示録第7、14、15、19章参照)。

ここに黙示録第7章、14章、15章、19章を参照するように書いてありますが、このあたりは是非味わっていただきたい。私はこれは現在の天界の姿であると、そのように受けとっています。何千年も何万年も後にこういう姿が成るというのではなくて、現在既に天界ではかくの如きであると。それが本当に終りのときに全き姿で現れるんでしょうけれども、もう既に現在、その質でもって天界はかくの如き姿であると、私は受けとっています。この聖言はこないだのK君の召天五十日記念会で引きました。ヨハネ黙示録7章9節から、

「9この後われ見しに、視よ、もろもろの国・族・民・言語の中より、誰も数えつくすこと能わぬ大なる群衆、しろき衣を纏いて手に棕櫚の葉をもち、御座とこひつじ羔羊との前に立ち、¹⁰大声に呼ばわりて言う『救は御座に坐したもう我らの神と羔羊とにこそ在れ』¹¹御使みつかいみな御座および長老たちと四つの活物との周囲に立ち、御座の前に平伏し神を拝して言う、¹²『アアメン、讚美・栄光・智慧・感謝・尊貴・能力・勢威、世々限りなく我らの神にあれ、アアメン』¹³長老たちの一人われに向いて言う『この白き衣を著たるは如何なる者にして何処より来りしか』¹⁴我いう『わが主よ、なんじ知れり』かれ言う『かれらは大なる患難より出できたり、羔羊の血に己が衣を洗いて白くしたる者なり。¹⁵この故に神の御座の前にありて昼も夜もその聖所にて神に事う。御座に坐したもう者は彼らの上に幕屋を張り給うべし。¹⁶彼らは重ねて飢えず、重ねて渴かず、日も熱も彼らを侵すことなし。¹⁷御座の前にいます羔羊は、彼らを牧して生命の水の泉にみちびき、神は彼らの目より凡ての涙を拭い給うべければなり』(ヨハネ黙示録7・9～17)

こういう姿はもう今、現実にも、天界ではかかる姿であると、私はそのように受けとっています。それから、19章は羔の婚姻の場面です。5節から、

「5また御座より声出でて言う『すべて神の僕たるもの、神を畏る者よ、小なるも大なるも、我らの神を讚め奉れ』⁶われ大なる群衆の声おおくの水の音のごとく、烈しき雷霆の如きものを聞けり。曰く『ハレルヤ、全能の主、われらの神は統治すなり、⁷われら喜び樂しみて之に栄光を帰し奉らん。そは羔羊の婚姻の期いたり、既にその新婦みずから準備したればなり。⁸彼は輝ける潔き細布を著ることを許されたり、此の細布は聖徒たちの正しき行為なり』

愛の行為と言いましようか。

⁹御使また我に言う『なんじ書き記せ、羔羊の婚姻の宴席に招かれたる者は幸福なり』と。また我に言う『これ神の眞の言なり』(ヨハネ黙示録19・5～9)

それから、21章1節、

「1我また新しき天と新しき地とを見たり。これ前の天と前の地とは過ぎ去り、海も亦なきなり。²我また聖なる都、新しきエルサレムの、夫のために飾りたる



新婦のごとく準備して、神の許をいで、天より降るを見たり。³また大なる声の御座より出づるを聞けり。曰く『視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神、人と偕に住み、人、神の民となり、神みずから人と偕に在して、⁴かれらの目の涙をことごとく拭い去り給わん、今よりのち死もなく、悲歎も、号叫も、苦痛もなかるべし。前のものに過ぎ去りたればなり』⁵斯て御座に坐し給うもの言いたもう『視よ、われ一切のものを新にするなり』また言いたもう『書き録せ、これらの言は信すべきなり、真なり』⁶また我に言いたもう『事すでに成れり、我はアルパなり、オメガなり、始なり、終なり、渴く者には価なくして生命の水の泉より飲むことを許さん。⁷勝を得る者は此等のものを嗣がん、我はその神となり、彼は我が子とならん。』(ヨハネ黙示録21・1-7)

こういう現実が、私はもう本当に既に天界で成っていると思つています。「主にありて死ぬる死人は幸福なるかな」というのが14章に出てくる。13節、

「¹³我また天より声ありて『書き記せ』今よりのち主にありて死ぬる死人は幸福なり」
御霊も言いたもう「然り、彼等はその労役を止めて息まん。その業これに随うなり」

と言うを聞けり。」(ヨハネ黙示録14・13)

これもK君の記念会で申し上げたと思いますが、本当にこのようにしてもう天地一如なんです。天地一如です。この地上で本当に、

「汝の御意を成さしめたまえ」

のこの生き方をした人は直ちに天界でこのような姿で主の懷にいだかれ、そして、主は目から苦しみの涙をぬぐってください。そして、歓びの涙に変わるといふ、そういう素晴らしい天界が実現する。もう、実現しているんですよ。本当に最後の審判のときには、またもつと凄いことがあるのかも知れませんが、もう私にとっては、最後の審判というもの——それを終末と言う——そこからの光がずーとこつちへ射し込んできて、トネルの向こうを見ているようなものなんです。向こうの世界がこつちへ迫ってきている。そして、ここへ切り込んで来ているんです。私たちは地上にありましては、一方でこの地上界というものに足を置いていながら、魂は霊界という天界へまたもう一方の足を置いている。両方の足を踏まえている。主さまに導かれて、地上にあらうが、天界に往こうが、同質的な生き方をしていく。地上にあつては、

「地上で御意を成させたまえ」

ということと地上での使命があります。その使命が終われば、本当に天界でまたお仕事があるというところでしょう。それが本当の永遠の生き方なんです。それに徹していくことが

「今日一日の日毎の糧を与えたまえ」

という、次の「五」の解説につながるんです。一日一日は向こうの世界から送られてくる。「来る日毎の」というのは、毎日毎日を神さまは新しくこの地に送り出してくださいとされている。



それを一日いただく。そして、力いっぱい生き抜く。そして、主の懷に安らかに休らう。

「我やすらかに伏してまた眠らん。そして、朝は我やすらかに目覚めたり」

という詩篇の3篇と4篇が引かれています。だから、

「今日一日の糧を」

というのは、本当に今日一日の分だけでいい。そういう一日一生という生き方をしなさいということが「五」で出てくる。ですから、実は「五」はこの「四」の続きなんです。けれども、今日は時間の関係で、「五」は次回に回しますので、先生の「四」をしつかり味わいましょう。

●天国部隊

また、もとへ戻っていただきます。34頁のところ、

《天界にあつては、神と羔こひつの聖座みくらを中心として、天使や聖徒等の万軍における聖き意志が行ぜられているのである。そのように、地界においても、このキリストの靈願を受けとる場は何処であるか。

「御意が行ぜられますように」という靈願です。それは、

既に論じて来たように、それは贖われたるこの惨めな罪びとを通してである。キリストの救のゆえに「聖靈の宮」となった「われ」を単位とした「我ら」、幕屋的実存共同体たるエクレシアを通しての他にない。

即ち、「主の御意を成さしめてください」と言つて投げ出して祈っている群、これは贖われたる群ですから、そこに御意が成就している。そして、その「まだ父を知らざる父の子ら」に我々呼びかける。その人たちもまた我々の祈りを媒介として、神の愛に目覚め気づき、そして神の民とされていく。そして、そこに大なる贖われたる者の群が現れていく。その拠点となるのは、我々一人ひとりが「聖靈の宮」である。聖靈の宮とされた者たちが集まつて、そこに「エクレシア」ができて上がっている。そこにまた聖靈が働きたもう。そういう構造になっている。

地上に於ける希望は、八方ふさがりである。ただ希望の光は「我ら」の頭上から聖靈の光としてのぞんでいる。「我ら」とは贖われたるあらゆる基督者である。「地にも成らせたまえ」とただ神を觀ているのではない。我らはキリストに在つて「遣つかわされたる者」である。「天国は汝らの中にあり」であるが故に「我ら」は在らしめ且つ体現せしめる責任を課せられ、使命をになわせられている。

しかし、かかる使命的存在が、この祈にあつて、上からの無限の迫力に推進せしめられる有難さよ。宇宙をも歴史をも回転せしめる枢軸が「汝の意志」聖意にあることを深く体し、その中に身を投ずることによって、聖意がこの小さき存在を用いて現成してゆくことにあずかる。これは基督者が本質的に実存的に伝道者たる所以ゆえんである。



一人の例外もゆるされない。聖国の実現のため、終末的な実存を行じ、聖国を地上に体現し、聖意を地にも現成せしめる聖なる飲ばしき使命をになっている。実存が即ち伝道なのである。》

先生の晩年の告白を見てみると、

「存在即使命、存在即伝道。皆さんは本質的に伝道者だ」

と、繰り返し先生は言っておられます。それは正にここなんです。このようにして御旨に投げ出したところに聖霊が上から臨んでくる、そして起き上がらせてくださる。起き上がらせくださったあとは、ノホホンとして楽しんで過ごすのではない。正に、天国部隊ですよ、キリストの戦闘員なんです。サタンと戦う、この世の不義と戦う、正に聖なる戦いに加えられる戦闘員なんです。キリストに身を捧げて、そして真理のために殉じていくという、そういう使命をあずかっている。もうじつとしてはおれませんかという。しかも、自分の力ではない。上から限りなく力を賜うから、それに乗っかっていく。地上は八方塞がりであっても、天上からは常に希望の光が射し込んでくるではないかと。

五十年前に書かれたとは思えないぐらい、現実味をおびています。戦争と平和の問題も結局はそこへ来ないと、本当には片付かない。地上から憎しみというものが去らない限り、自我というものが巣くっている限り、民族的対立もすべてそうなんだと。

今の世界は、米ソという強力な枠組みが壊れました。それだけに、籠^{たが}がゆるみまして、もういろいろな民族的な自覚がめざめました。目覚めたということは、どんな小さな小民族も自己主張をするようになったわけです。それはある意味では正しいけれども、それが単なる自己主張で終わっているかぎりには、限りなき衝突になってしまいうわけです。今まで抑圧してきたものに対する恨みがありますから。

その恨みを流し、本当の一つを成就してくださるのは福音しかない、エペソ書が言っていますし、主の祈がそうです。その意味で、この「主の祈り」、福音は本当に21世紀の世界に対する、その根底を差し出してくれている最大のプレゼントだと私は思います。小さな自分というものははずれて、本当の天の調和、ハーモニーに帰そうではないか。天界においてキリストが輝いていらつしやる。神は審判の神ではなくて、愛の神である。そういうふうな福音を受けとり直してほしい。その受けとり直すきっかけに、この『聖意体現』が叫んでいるわけです。そういうことを思うと、私もなにかたまらない気持ちになります。」「この単純な福音をどうしてくれるんだ。なぜ、受けとってくれないんだ」という気持ちになります。

●否定を通して本当の肯定がくる

では、36頁。あと終りまで読みましょう。

《「新天新地」(黙21、22章)の聖国を待つ者は、聖意を行ぜんことを地上における終末



的現実の悲願とする。かくしてこの悲願を実存してこそ、真に祈り待つという者である。たとい病床の仰臥^{ぎやうふが}のままでも、そこに終末的実存の相は、静中の動として、躍動し得るのである。地上では、どのように失敗であろうとも、かかる実存とその祈とは、必ず末の日に新天新地に成就する。それ故に、この地上の終末的現実において既に勝利しているのである。

以上、聖名と聖国と聖意を主体として祈り求めた祈は徹底的に終末論的性格をもつ。且つ、その終末性は深く、来たらんとして迫る神の国の事態に関わる。と同時に、強く、この現実を終末性においてとらえた実存問題に関わる。それは、最初の「在天の我らの父よ！」の呼びかけにおいて、何ものもこれをさえぎることのできない霊的現実性を以て展開されているのである。この真に素晴らしい現実を告白しようとして、私は言に絶し、想いに絶するのである。主よ、わが悲願をあわれみ給え！

「われ東より鷺^{わし}をまねき、遠き国よりわが定めおける人をまねかん。我このことを語りたれば、必ず来^{きた}らすべし。我このことを語りたれば、必ず成すべし。」（イザヤ 46・11）

先生は、「終末論的」とか「実存」とかいう難しい言葉を使われるから、ちよつと、皆さん、戸惑われるかと思えますけれども、言わんとなさっていることは、私が今申し上げたようなことなんです。

常に向こうの方から、終りから光が射して来ている。我々の個人としてこの生命というものは必ず死というひとつの終りに面している。しかも、それは何時^{いつ}くるかわからない。そういう形で迫ってきている。それを突破していく実力を主はくださった。だから、我々はどう死を恐れない。また、罪も恐れない。審判はもう終わっているんだから。そうやって生命に甦^{よみがえ}って、その霊的な御霊の生命で活かされていく。

それから、この世界の歴史というものも必ず終りがくる。その終りが迫ってきている。その終りの中では、歴史というものは捉えられないんだと。次の「五」のところ出てきます。その歴史の終末が迫ってきているなかで、各民族は自分の生き方を探し求めている。しかし、その生き方も結局、

「御意の天に成るごとく、地にも成らせ給え」

という祈り、己を棄て去った祈りの中ではじめて、その民族はその民族性を発揮できる。

「いつペン否定されることを通して本当の肯定がやってくる」

ということを、先生は訴えたいのだと思います。それはまた「五 今日一生」のところ出てきますから、またの機会ということにして、本日はこれにて話は終りいたします。

● 祈り

お祈りいたします。



主イエス・キリストさま。今日もこうして、あなたに贖われし兄弟姉妹をこのように集わしめてくださって、ありがとうございます。主さま、元気でここに集えたということ自体が本当にあなたの恵みでございます。主さま、まず朝、目覚めましたときに、

「主よ、あなたが守ってくださってありがとうございます。今日一日も、どうぞ、あなたのみ光の中に、ご愛のみ手の中に保ち、そして過ごさせてください。どうぞ、あなたの御意をこの我を通して成就せしめてください」

と。その祈りをもって一日を始め、そして、あなたの御意のままに、おん導きのままに身をゆだねてまいります。そのようにして歩む日々は、どんなにはかどろうがはかどるまいが、躓こうが倒れようが、主さまが全責任をもって引き受けてくださいますから、常にアーメン・ハレルヤでございます。そのようにして、本当に全托しゆだねきって行きますときには、なんと楽な本当に力味のない、そしてそこに本当の輝きが現れるような生き方ができてまいります。

主さま、僕は新宿に参りまして、日々にそのことを味合わせられ、日々に感謝して生きております。主さま、どんな重い仕事も、重い使命も、主さまが担ってくださるが故に、私は、身は安けし心は常に平安であります。そして、主に在る兄弟姉妹たちと隔週とはいえ日曜ごとにこのようにしてあなたを讃え、また、先生が語ってくださった福音の素晴らしさを今天界にいらっしゃる先生と祈りを共にしつつ、こうして集会を共にできますことを、平伏し聖名にあつて感謝申し上げます。

どうぞ、この集会を祝福してください。先生の本当に悲願霊願がかかっております。一人びとりを本当に一騎当千の戦士として、福音の証者として、あなたがおん用いくださいますように、こいねがいたてまつります。

今日、この場に居合わせない兄弟姉妹をも、また各地でもたれていますそれぞれの召団の集会、主に在る兄弟姉妹たちの祈りの集いを、どうぞ祝福してくださいように。また、病を得ている人たちを、どうぞ、主さま、あなたが直々にその側にあつて懇ろに慰め、御手を按おいてくださいますように。ことに小さき者たちを、どうぞ、顧みてくださいますように。主イエス・キリストの聖名に在って、この祈りを御前にお捧げいたします。アーメン！

(参考 本文) キリスト告白録第3巻『聖意体現』

「聖意体現」——実存の源なる「主の祈」、私の信仰告白として(マタイ6・9～13)

1959年12月 聖誕節 小池 辰雄

●四 聖意体現

「汝の御意みこころの成し遂げられんことを、天に於ける如く地においても」(マタイ6・10下)



「汝の御意の成し遂げられんことを」との言は、イエスがゲッセマネで、最も深刻な祈において、そのまま叫ばれた言葉である。それは最早単なる言ではなく、宇宙にしみ渡り、乾坤^{けんこん}をつらぬいてひびき渡った呻きであつた。「汝の御意^{みこころ}が成る」ためには、わが意^{こころ}が否定されねばならない。決定的な肯定がなされるためには、決定的な否定が生じなければならぬ。神の意志と私たちの意志とが、その如く相反するのは、私たちの実存が根本的に失われた実存であるからである。

福音による信仰的、霊的実存のほかの実存は、すべて挫折する没落への実存であり、虚無への実存である。哲学的、倫理的、美的実存は、すべて絶望への実存である。ただ信仰の実存においてのみ、それは審判への実存を転換して、救贖への実存として実存が実現する。すなわち、私たちの意志が徹底的に「否」と審判される烈しい律法（神の要求においてのみ、基督教の倫理性がある。神との関係において考えられない倫理は、福音の倫理ではない）の自覚、換言すれば、私たちは神の前に「一人も義人であり得ない」自覚である。それは、パウロがロマ書で明言し、ルッターが真剣に体得した真理である。罪が腹の底から告白されて、神の意志（それを義とは言う！）の前に降伏し、わが意志（自己義認、自己追求、自己拡充）を否定し去るとき、はじめて、神と我との関係は成り立つのである（イザヤ46・10〜13はこの神の義の成就を宣言した重要な聖句である）。

神と我との関係は、

「あれかこれか」(entweder-oder)

であつて、決して、

「あれもこれも」(sowohl-als auch)

ではない。神に「然り」ということは、おのれに「否」ということである。「主の祈」の中核は正にこの「汝の御意を成させ給え」（「汝の御意の成し遂げられん事を」の簡潔な表現）の一言にある。ところが、普通「み意を成させ給え」という聖言を、自分をそつとして置いて、神のみ旨の成ることをややもすると傍觀的に、あるいはあきらめの如き気持ちで願っている場合が多くはないか。これはそのような無責任な生半端な心で、発せられる言葉ではない。御意の成就のためには、我が意志はその下に死なねばならない。死の決断を迫られているのである。これこそ最も烈しい祈である。ここに初めて力ある義の実存が動くのである。

日本の武士の割腹（自刃）それ自体の善悪の問題は別として）には、そのような烈しい倫理性が動いていた。たとえば、赤穂義士は主君の義の踏みじられたことに対して、その義を立たしむべく仇討ちをした。しかし、その仇討ちの行動そのものへの責任を自ら死を以て執つたところに、彼らの義に生き、義に死のうとしたおごりかな無私の四十七士魂の光があつたのである。明治の乃木、昭和の阿南両將軍の自刃^{じじん}にも、これと同質の義への責任意識が光っている。両將軍は部下おもしろい情の厚い人間であつた。深い愛の人の義の白熱は知る人ぞ知る！



聖意を現成するため、み旨を行ずるために、イエスはその生涯を貫き給うた。それ故に、ヨハネ伝に繰り返し言いあらわされている如く、イエスは、神のことを「我を遣わし給いし者」と言つて居られる。彼は神の僕として霊神の意志を行ずる者、父の子として父神の本質を具現する者として、自らを自覚し給うた。つねに人間の意志を殺して、神の意志を生かして在り給うた。そうして、十字架につくつかぬかの祈においては、人間の弱さを底まで担いたもうたイエスに、あの苦痛があつたわけである。イエスは、エリヤ以上に、いきなり天界に昇るに最もふさわしい人であつた。しかしイエスは、キリストとして、人間の贖罪のために十字架を現実にならぬところに、追いつめられ給うたのであつた。十字架の死を通して、全人類の罪と死に対する勝利を勝ちとり、それを与えるという路！当時の権勢者・祭司・学者・パリサイ人、さては、イエスのあわれみをうけた群衆からさえ、またイエスに従いしあの弟子たちにもすらも、棄てられて。

これと同質なのが、我らの神の「汝の意志」なのである。この「汝の意志をして成らしめ給え」との祈において、我らが否定されることは如何にして可能であるか。それはただこれを実存し、碎け得ざる我らのために、自ら碎け給うたキリストの十字架の恩恵を、パウロの言いし如く「キリストと共に十字架につけられた我」を見ることによつて。我が罪のこの身このままこの意志が、既にかしこなる十字架につけられていることを、恩寵として受けとることによつて。わが意志がかしこに死んでいることを信じ受けとることによつて。その様な碎けの完了、徹底的手術の完了を、キリストが自らわがために十字架においてなし給うたのである。その事実を、現実として受けとることによつてのみ、可能なのである。

そこには、深い祈と烈しい捨身的行為が必然起こってくる。大死一番とは、キリストの恩恵の力に迫られて突きぬける信仰的行為である。信仰は正に信行であり、かくてキリストとの信交となる。そこに真の聖霊の現実が、根源相があるのである。かくてパウロと共に「キリストわがうちに生き給う」という告白に移る。霊なるキリストをかくの如く受けざる限り、「修養」も「冥想」も「没我」も空しく、それはキリストの十字架と復活の生命を、拒否することであつて、福音からの逸脱である。いわゆる「修養」や「神秘」の路でいかに自己を否定しようともじつは自己を肯定しているのである。自己の真の否定は、自ら否定できない根源的罪性がキリストの十字架において否定されていることを絶対恩恵として受けとることである。霊的転換によつて、霊的実存のいのちに入り、成就されてゆくのである。そうでない限り、自己の否定は観念的な思い込みにすぎず、十字架も復活も、思われたる信仰内容にすぎない。そういう安易な「信仰のみ」が何と多いことであらう。これに反して、真にキリストの霊に生きる世界に開示してくる神秘・奥義（ミステリオン）は、深まりゆけばゆくほど主のよろこび給うところである。ペテロもパウロもヨハネも、そこに一切の力と智慧の源泉を汲んだのである。

かくて「汝の意志を成らせ給え」は、十字架を枢軸として「わが意志」が否定されると



同時に「汝の意志」がわがうちに成りゆく消息である。即ち「汝の意志」は、十字架の故にわがうちに救贖の実力として降下してくる。汝の意志の場に聖霊が鮮やかにはたらき給うのであって、救贖の実力の内実は、聖霊と共にはたらき来たる汝の意志である。そのとき私たちは明らかに福音が神の力であることを知る。かかるおごそかな意志の転換の場は、まったく観念の事象ではなく、聖なる霊のはたらき給う事態である。それはまことに根源的な聖霊の場であつて、断じて心霊的な現象の場ではない。

かかる神の意志の内容は、言うまでもなく実存的な個々の場合によつて異なる。その聖霊の存する場において現するものが、愛の行為であらうと、事業であらうと、奇蹟的な能力(所謂「奇蹟」というものはない。神の全能のわざを知らぬから「奇蹟」というのである)や神癒的なはたらきであらうと、パウロがコリント前書12章や14章で述べている霊の賜(たまもの)であらうと、問題ではない。いずれにせよ、そこには聖き神の力が根源的にはたらく。それがどのような現象をおこそうと、おこさざると、問題ではない。ただ真に梅の樹ならば、梅の花が咲き、梅の果が成るように、この如きキリスト一切の現実が本ものであるなら、それは聖霊の根源相の場であり、その現象は聖霊による現象である。それをとやかく警戒したり、批判するならば、それはキリストの十字架に、キリストの現霊たる聖霊に対する不信と言わざるを得ない。福音書は言うまでもなく、使徒たちの「愛」の実存も「力あるわざ」も、すべてかくの如き現実であつた。福音書や使徒行伝は、そのようなおごそかな自覚のもとに読まれねばならない。

かくて端的に言うならば、「汝のみ意を成させ給え」は、

「汝のみ意をこの罪びとなるダメな私を通して成させ給え」

である。深く深く十字架に救われている魂においては、自らには徹底的に弱くダメな罪びとという破れの器、土の器の自覚がいよいよ深くなる。それだけに、いよいよ砕かれて、力強く、大胆に、率直に、親しく

「汝のみ意を我において成さしめ給え」

と祈れるのであり、そしてそこには、聖霊が聖く熱き白熱の愛としてはたらいてくるのである。この恩恵の現実を如何せん。ただ聖名を讃えるのみであつて、われらの側に誇るべき微塵の影も形もないのである。そのとき、

0 || 100 (0 || ∞)

というイエスの現実が近くなる。

しかもそのことは、即ちみこころが「天に於ける如く地においても」という天地照応の意味を直ちにもっているわけである。即ち天界は神の意志の直接的に成りゆく世界である。

「諸々の天は神の栄光を現わしている。」(詩篇19・1)

「彼に仕うる者は千々、彼の前に侍る者は万々」(ダニエル7・10)
であり、



「ヤハウエーの聖言は天にて永遠に定まっている。」(詩篇119・89)
という世界である。

天界にあつては、神と羔こひつじの聖座みくらを中心として、天使や聖徒等の万軍における聖き意志が行ぜられているのである(黙示録第7、14、15、19章参照)。そのように、地界においても、このキリストの霊願を受けとる場は何処であるか。既に論じて来たように、それは贖われたるこの惨めな罪びとを通してである。キリストの救のゆえに「聖霊の宮」となった「われ」を単位とした「我ら」、幕屋的実存共同体たるエクレシヤを通しての他にない。地上に於ける希望は、八方ふさがりである。ただ希望の光は「我ら」の頭上から聖霊の光としてのぞんでいる。「我ら」とは贖われたるあらゆる基督者である。「地にも成らせたまえ」とただ神を観ているのではない。我らはキリストに在つて「遣つかわされたる者」である。「天国は汝らの中にあり」であるが故に「我ら」は在らしめ、且つ体现せしめる責任を課せられ、使命になわせられている。

しかし、かかる使命的存在が、この祈にあつて、上からの無限の迫力に推進せしめられる有難さよ。宇宙をも歴史をも回転せしめる枢軸が「汝の意志」聖意にあることを深く体し、その中に身を投ずることによつて、聖意がこの小さき存在を用いて現成してゆくことにあずかる。これは基督者が本質的に実存的に伝道者たる所以ゆえんである。一人の例外もゆるされない。聖国の実現のため、終末的な実存を行じ、聖国を地上に体现し、聖意を地にも現成せしめる聖なる歓ばしき使命になつてゐる。実存が即ち伝道なのである。このような福音の伝道と実存によつてのみ、平和と戦争の問題への根本的解決がのぞまれるのである。すべての闘争の原因は自己主張からくる(ヤコブ4・2)。これは神の意志を立てることに根本的に反する。そのような実存的な在り方に裏づけられずして、「地にも成らせたまえ」は空念仏となる。祈がすべて実存の中から発せられるとき、真に祈なのである。だから「主よ、主よ、という者が必ずしもみ国に入らない」とキリストは戒められた。沙漠や曠野に花を咲かしめる使命を帯びて遣わされている者は、即ち基督者であつて、この祈こそ「主の祈」の中核を成す(イザヤ書第35章参照)。

「新天新地」(黙21、22章)の聖国を待つ者は、聖意を行ぜんことを地上における終末的現実の悲願とする。かくしてこの悲願を実存してこそ、真に祈り待つという者である。たとひ病床の仰臥ぎやうがのままでも、そこに終末的実存の相は、静中の動として、躍動し得るのである。地上では、どのように失敗であろうとも、かかる実存とその祈とは、必ず末の日に新天新地に成就する。それ故に、この地上の終末的現実において既に勝利しているのである。

以上、聖名と聖国と聖意を主体として祈り求めた祈は徹底的に終末論的性格をもつ。且つ、その終末性は、深く、来たらんとして迫る神の国の事態に関わる。と同時に、強く、この現実を終末性においてとらえた実存問題に関わる。それは、最初の「在天の我らの父よ!」の呼びかけにおいて、何ものもこれをさえぎることのできない霊的現実性を以て展開されて



いるのである。この真に素晴らしい現実を告白しようとして、私は言に絶し、想いに絶するのである。主よ、わが悲願をあわれみ給え！

「われ東より鷺^{わし}をまねき、遠き国よりわが定めおける人をまねかん。我このことを語りたれば、必ず来^{きた}らすべし。我このことを語りたれば、必ず成すべし。」（イザヤ46・11）

